

旧制 甲南高等学校創設者
平生鈞三郎の教育理念とラグビー観
～日記の記述を中心にして～

高木 應光¹⁾ 西村 克美²⁾ 灘 英世³⁾

I. 緒言

令和5年(2023)、旧制・甲南高等学校が創立100周年を迎えた。例えるなら、阪神間モダニズムの地で大正デモクラシーと出会い、誕生したのが7年制・甲南高等学校(以下、甲南高校)だった。創設者は、平生鈞三郎(写真1、〈1866-1945〉)(以下、平生または鈞三郎)である。



昭和11年(1936)3月、首相・広田弘毅から平生に大臣就任の声がかかり、「文部大臣なら引受ける」とのエピソードが残る。30数年の長きに亘り東京海上保険株式会社(以下、東京海上)で重責を担い、辞職後は教育・地域医療など社会奉仕にその

写真1(甲南大学資料室より)身を捧げた。文相就任も、その一つだった。

平生が奨励したラグビー・フットボール(以下、ラグビー)が盛んだった甲南高校では、部活動はもちろんクラス対抗の7人制ラグビー大会も行事化され、校技として取り扱われていた。しかし、ラグビー部への特別な配慮・便宜を図ることなど一切なし。いわんや今日、私学で見られるようなラグビー経験者や素質ある生徒を特別枠で入学させ、ラグビー部の強化を計るなど全くあり得ないことだった。

ところで、平生はどのような経緯で自身の教育理念やラグビー観を持つに至ったのだろうか。また、全くラグビー経験が無いにもかかわらず、なぜ盛んにラグビーを推奨したのだろうか。これ等

の疑問を解くことで、教育とスポーツの関係は、どうあるべきか、またラグビーの教育的価値について再考することが可能となるのではなかろうか。

II. 研究方法

平生鈞三郎の思想や業績を追究するには、河合哲雄『平生鈞三郎』、津島純平『平生鈞三郎 追憶記』、安西敏三「平生鈞三郎と甲南教育 ～英国的教育の模索～」『甲南法学 53 卷 4 号』などが存在する。しかしながら、本論のテーマについての先行研究はほとんどない。かろうじて示すなら、三宅 遵「平生鈞三郎とスポーツ」『平生鈞三郎日記 第 17 卷附録』であろう。三宅氏の論考も参考にしながら、筆者らは『平生鈞三郎 日記 1～18 卷、補巻』(全 13,419 ページ)を本論研究の主たる対象とした。

この膨大な日記から旧制・甲南高校の創立意図、教育方針等を確認すると共に、スポーツやラグビー等についての記述を通して平生鈞三郎の教育理念とラグビー観について考察しようと試みた。

III. 考察

1. 武士としての生い立ち

平生鈞三郎は慶応2年5月22日(1866年7月4日)、美濃国加納町3丁目(現、岐阜市加納鉄砲町1丁目)の田中時言・松の三男として生を受けた¹⁾。父・時言はもともと田中家の人ではなく、武家の出身でもなかった。美濃国厚見郡高田村・庄屋の三男だった²⁾。しかし百姓の子でありながら、百姓を嫌い武士であることを熱望していた。一方、一人娘の田中家では武家の後継ぎとして、

1) 神戸居留地研究会 2) 明治国際医療大学 3) 関西大学

この時言を婿養子として迎えた。非常なる名誉と感じた時言は、一層武士らしく振る舞うことを肝に銘じた。

釦三郎の幼少期、彼の人生を決定づけたと思われる出来事があった。それは、町内の子供たちの悪戯から始まった。釦三郎の兄らが落とし穴を掘り、常々酒を買いに行く近所の少年を転落させた。徳利は割れ、酒は路上に流れ、少年は泥だらけになり怪我を負った。これを知った父・時言は、兄に対し

衣服を剥ぎ取って丸裸とし、庭前の柿の古木へ後手に縛りつけた。それから時言は刀箆筒から一刀を取り出して来て縁先に腰をかけて鞘を払った。その口をついて出た言葉の中には一徹な、不義を憎む、昔ながらの武士の魂が呼吸をしていた。「貴様は武士の子ではないか。だまし打ちが武士が最も耻とする所なるに、貴様の今日の行為は何たることぞ。田中の家名、父の顔に泥を塗るものではないか。かような痴れ者を活かしておいては祖先に申訳が立たぬ。打首にして遣わすからさよう心得ろ。」(河合哲雄『平生釦三郎』：以下、【参考文献】番号で示す。

② p6)

この様子を目の前で逐一見ている釦三郎は、恐れおののき一生この日の出来事を忘れることはなかったという。釦三郎にとって、不正、不義、卑怯を憎み、一寸の仮借も許さない態度、武士道精神を身に着ける契機となった。

時代は幕末から新たな明治に移ろうとする時で、大政奉還、廃藩置県、廃刀令、秩禄処分など矢継ぎ早に新制度が敷かれた。四民平等となり、武士階級そのものが終りを告げた時期であった。父・時言は、かつてのように藩からの俸禄に依って生活を支えることが出来なくなる。そのため、和傘の骨削りを生業とせざるを得なかった。釦三郎の生誕地、加納町は江戸時代から美濃和紙を使った和傘の産地として全国的に知られていた。父が削った傘骨を問屋へ届けるのが釦三郎の仕事

で、時にはついでに 20～30 銭の前借りを頼むことさえあったという。父自らが、それを申し出ることに武士の矜持が許さなかったのであろう。

2. 平生への改姓

8歳になった明治6年(1873)、憲章校(後、加納尋常小学校)へ入学。そして明治12年('79)4月14歳で岐阜中学へ入学するも学費が続かず、わずか1年3ヶ月で退学。海運会社の丁稚として身を立てるべく上京。たまたま見かけたポスターで東京外国語学校・露語科に優秀な成績で入学、官費生となる。ところが、学校編成の煽りを受け明治19年('86)改めて東京商業学校(後、東京高等商業学校)を受験、入学するも給費生制度もなく学費に困窮する。しかたなく遠戚の平生忠辰(当時、岐阜地方判事)の養子となり学費を繋いだ³⁾。その後、校長・矢野二郎は平生釦三郎の学才に期待し、特別に給費生とした。明治23年('90)平生は、首席で東京高商を卒業、時に25歳だった⁴⁾。

卒業と同時に、矢野校長の命で母校・高商の附属主計学校で助教諭を8か月。翌年3月から2年間、朝鮮・仁川海關幫辦を勤めた後、28歳で兵庫県立神戸商業学校・校長を拝命。およそ1年3ヶ月、同校の立直しに尽力した。

その後また、矢野校長の命で東京海上保険株式会社(以下、東京海上)に入社、時に明治27年('94)29歳。以後、60歳で同社を辞職(当時、専務取締役)するまで、およそ30年間、同社の発展に努めた。

3. 三分割の人生設計

平生は東京高商を卒業する25歳の時、将来について人生設計を描いた。即ち、25歳までを学業の時代とし、50歳までの25年間を仕事の時代、そして日記に「50歳以後は公利公益を先にし国家社会の為に余力を尽くさんと計画せる」と記している⁵⁾。つまり、50歳から社会奉仕に尽力するつもりであった。

平生が社会奉仕時代に務めたことは、幾多の事業及び役職への就任だった。主なものだけでも拾芳会（平生個人の育英事業）、甲南学園の創立・育成（期間：34ヶ年）、灘購買組合（現、コープこうべ）理事就任、大阪ロータリークラブ設立・会長、甲南病院の設立・運営（15ヶ年）、川崎造船所社長・会長への就任（4ヶ年）、ブラジル訪問経済使節団長（6ヶ月）、文部大臣（11ヶ月）、日本製鉄社長・会長（4ヶ年）、大日本産業報国会々長（4ヶ年）、などであった。中でも平生が最も尽力したのが、甲南高校の創設・育成であった。

4. 阪神間モダニズムと大正デモクラシー



写真 2. 阪神間初の開発住宅地・現 JR 住吉駅山側：

財界人の邸宅が多く位置した。

坂本勝比古「御影・住吉/神戸」『近代日本の郊外住宅地』鹿島出版会)

明治 7 年 (1874) に開通した大阪～神戸を結ぶ官営鉄道 (現, JR) は、国内 2 番目の路線で途中に神崎 (後, 尼崎)、西ノ宮、住吉の 3 駅が設けられた。これら 3 駅の中で住宅地として好適な地は、住吉川の扇状地に拓けた住吉駅北側 (山側) 辺りであった。大阪市内の大気汚染等を避け、財界人たちが阪神間、中でも住吉近辺へ邸宅を移しつつあった。発端は村山龍平 (朝日新聞社・創業) で、

明治 33 年 (1900) に 6,000 坪 (19,800 m²) 超を取得し転移した⁶⁾。次いで明治 37 年 ('04) 久原房之助 (久原財閥) が、住吉川東岸に 1 万坪超を購入、大邸宅を建てた。この地の住宅地開発を進めたのは、阿部元太郎 (後, 日本住宅) で、田邊貞吉 (住友・理事: 移住・囃 38 年)、岩井勝次郎 (岩井商店主: 囃 38 年)、鈴木馬左也 (住友・総理事: 囃 38 年)、^{ひろせ}弘世助三郎 (日本生命創業: 囃 41 年) が続いた。

大阪や神戸から財界人・富裕層を迎えた阪神間は、一早くモダンなライフスタイルが展開されて行くことになる。それは、後世「阪神間モダニズム」と呼ばれた和風テイストのモダンな生活文化であった。洋食、洋菓子、洋服、洋楽、洋画、洋館、ホテル、パーティ、カメラ、茶室付き住宅などがそれだった。もちろんスポーツも本格的に展開された。これらは、[上方・日本文化] × [神戸からの欧米文化] = 「阪神間モダニズム」と分析できる。



写真 3. 平生夙三郎邸：1924 年 (炷 13) 撮影

(甲南大学資料室より)

平生は明治 42 年 ('09) 東京海上・大阪社宅から、ここ摂津国菟原郡住吉村 (現, 神戸市東灘区住吉本町 2 丁目 29 番) の 800 坪 (2,640 m²) へ転居する。間もなく近所に住む「^{ひろせ}弘世助太郎 (日本生命第 3 代社長) の訪問を受けた。用件は、(略) 財界人や土地の (略) 子女のために小学校を創設したいので協力してもらいたいとの事であった⁷⁾。」甲南幼稚園・小学校の創設に関し、教育経験

者として協力を求められたのだった。それは、1年余の県立神戸商業学校々長（1893.4～'94.6）としての実績を買われてのこと。中心になったのは、弘世はもちろん田邊貞吉（甲南初代理事長）、阿部元太郎、野口孫市（建築家）ら関西の実業家10名余りだった。

「大正デモクラシー」と呼ばれた社会思想・運動は、教育の分野でも顕著であった。当時、阪神間では公立と私立の比率が5：5で、キリスト教系を含め私学が多い全国でも珍しい地域だった。

甲南の小学生も成長し、大正8年（'19）には甲南中学校を設立。「幾何・代数の授業ではロンドンから取り寄せた原書をテキストに利用、国語では現代小説を読ませてディスカッション、地理では阪神間の都市計画を立てさせる等々、自由に創意に満ちた甲南独自の学風を育てて行った⁸⁾。」当時の教育状況を平生は、次のように日記に記している。

（略）人間を空瓶とし、単に詰込みたる知識の蓄積が人物を造るものと誤解し、試験といふ苦を以て児童、生徒、学生を鞭撻、迫害して、単に点取虫として試験成績の優越を競争せしめ、精神的にも体格的にも衰耗を意とせざる教育を施し（略）健康も意に介せず、単に高等学校や高等専門学校への入学生多きを誇とせるが（略）体位が甚しく低下して、結核に罹るもの年と共に増加（略）人格的に劣等にして（略）利己的にして協同心薄きものは青年学生である、青壮年の官吏、事務員である（略）

（記述日 1941. 10.19：以下略す）（①17 p673）

新しい教育思潮は関東でも同様だった。武蔵高等学校は根津嘉一郎（甲州財閥）が、成蹊高等学校は岩崎小彌太（三菱財閥）が、強力に支援した学校である。財界や実業家たちの多くは、明治以来の官立教育に飽き足らず、先進的な「教育家や英国パブリック・スクールに傾倒する国際派経済人で⁹⁾」平生もその一人であった。

5. 7年制 甲南高等学校（写真4）

旧制高校と言えば、多数が東大へ進んだ東京の第一高等学校（以下、一高）や関西でのラグビー嚆矢校・京都三高、さらには夏目漱石や嘉納治五郎らが、教壇に立った熊本・五高などナンバー・スクールがよく知られる。

日清・日露戦争に勝利し、世界にその存在を知らしめた大日本帝国は、第1次大戦下の好況期を通してさらなる工業化を進め、世界の列強に大きく近づいた。このような状況下に高学歴の人材が、多数必要となる。一方で「大正デモクラシー」は、原敬内閣を生んだ。政府は大正7年（1918）「高等諸学校創設及び拡張計画」を進め、高等学校は もちろん高等商業、高等工業、高等農林、外語、薬学などを設置。翌年この一環として第2次高等学校令を施行、私立校の創設も許可された。従来、中学校5年間と高等学校3年間、計8年の就学を必要としたが、この改正で7年制高等学校（尋常科＝中学4年間＋高等科3年間）、しかも私学の創設が可能となった。



1927（昭和2）年頃の校舎

写真4. 甲南高等学校・本館とテニスコート（手前）

（甲南大学資料室より）

この発令に一早く応えたのが、大正11年（'22）創立の武蔵高等学校（東京・練馬区）、続いて甲南高等学校（神戸・東灘区岡本）が翌（'23）年に、そして成蹊（東京・武蔵野市吉祥寺）が大正14年（'25）に、さらには成城（東京・新宿区原町）が

昭和元年（'26）と続いた。即ち甲南は全国で2番目、関西で初の7年制・私立高等学校で、尋常科60名、高等科53名を同時入学させスタートした。時に平生鈞三郎58歳¹⁰。なお関西では7年制・私立高校は唯一甲南のみで、それだけに特異な存在だったと言えるだろう。

徳・体・知への転換

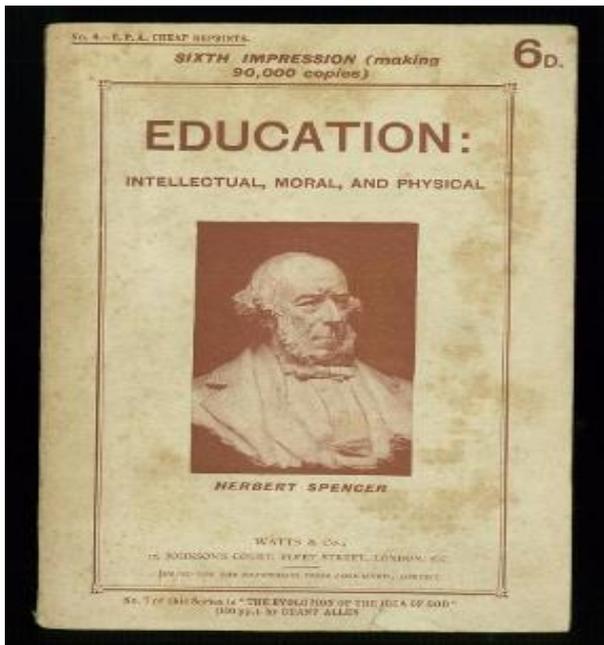


写真5. H. スпенサー『教育論』1860年出版

英国の哲学者・社会学者 H. スペンサーが、1860年（安政7）に『Education; Intellectual, Moral, and Physical（教育：知育、徳育、体育）』を出版（写真5）。俗に言う「スペンサーの教育論」として一世を風靡する。我が国では尺^{せき}振八^{しんぱち}・翻訳の『斯氏教育論』（暁13年）として紹介され、「スペンサーの時代1880～90」とまで言われ人気を集めた。福沢諭吉も『学問のすすめ』の中で「知育・徳育・体育」を説明しているほどである。それは、教育の3要素「①知、②徳、③体」とも言われ、一般的にも理解されやすいものであった。ところが平生の教育論では、この3要素の順序が「①徳、②体、③知」と入れ換っている¹¹。それは、なぜだろうか。

大正の初期、当時の陸軍大臣・大島健一が、地

方官会議で徴兵検査の結果について「甲種合格者が、高等小学校卒で36%、中卒28%、高卒で20%、大卒で7.5%（略）（日記1916.5.16）¹²」であると語っている。これを知った平生は、日記に「（略）学問亡国、文化亡国を叫ばざるべからず。（略）体格の優良は^{ただ}暫に兵士としてのみ必要なるにあらず、学者としても技術家としても、政治家としても実業家としても、凡そ日本帝国の民として健全なる身体と共に健全なる精神を有せざるべからず（1916.5.17）¹³」と現状を大いに憂いている。即ち、当時の状況は高学歴ほど甲種合格者が少ない、という由々しき状況を示していたのだった。

故に平生は、明治以来の三育主義（知・徳・体）を転換させるべきであると言う。即ち「知育偏重の弊を避け、人格の修養、健康の増進を第一義とし、個性を尊重して天賦の知能を啓発すべき知的教育を施さん¹⁴」、「（略）より簡潔に言えば、①徳育、②体育、③知育¹⁵」の順に転換しなければならないと平生は記す。

6. 平生とスポーツ

甲南の教育について平生は、スポーツを大いに奨励したが、その背景には自らのスポーツ経験と観戦、さらにはスポーツに対する平生自身の高い見識があったからと言えるだろう。

ボート

大正4年（1915）4月3日の日記に「（略）この日は例に依り東京高等商業学校端艇競漕会あり。在学の当時クラス選手として墨水にオールを握りし快味は、満25年を経たる今日といえども忘るる能はず¹⁶」と記している。

日本人によるボート競漕は東京・隅田川から始まり、明治10年（1878）頃には、そのメッカとなった。隅田川ボート碑（建立2016/年28）には、「夏目漱石も漕ぎ、福沢諭吉も漕ぎ、レガッタは《春のうららの隅田川》と瀧廉太郎の『花』にも歌われボートは隅田川の華であった」と刻まれている。

平生が在学した当時の東京商業学校(後,東京高商,一橋大学)では、今日で言う自治会活動が始まった頃だった。平生は英語会で『シーザー』(シェークスピア原作)のブルータス役を演じたという。また、唱歌会では創会者でありながら水島欣也(後,神戸高商校長)とともに音痴グループに入れられ、歌わせてもらえなかったという¹⁷⁾。

多方面で活躍した平生だが、最も力を入れたのはボートだった。明治20年(1886)に始まった校内クラス対抗ボート競漕に、連続してクラス代表となるも敗退続き。最後の年、平生は意を決し「2月初より風雨雪を厭はず日々隅田川に於て練習をなし(略)¹⁸⁾」競漕当日は、校長夫人からの財囊もあり¹⁹⁾、いやが上にも盛り上がりを見せ、更にはと平生は記す。

隅田川辺の桜は今や満開にして早咲きの花は、そよ吹く風に誘はれてチラリホラリと飛散りて風情を添へ、観衆は土堤を埋むるの盛況なりき。(中略)桜花は時に戦士の面を打つ此時の感じは実に何とも言ひ知れぬものにて、若き武士が戦場に赴く時の意気やかくやと思はれ、所謂武者ぶるひの感あり。

(④ p78)

平生のボート経験は、3年後校長として赴任した県立神戸商業学校(県商)の立て直しに生きる。即ち、活気のなかった同校を立て直そうと考え、人気のボートに着目「6艇櫓の端艇2隻を買入れた²⁰⁾。」だがボートを漕げる生徒が一人も居らず、校長の平生自らが指導した。やがて2ヶ月も経つと生徒たちは、急速に上達、須磨辺りまで遠漕するグループも現れ、平生は県商の立直しに意を強くした。

ゴルフ

日本のゴルフ発祥地は神戸だった。明治34年(1901)神戸の英国人貿易商A.H グループが、背山・六甲山に造った4ホールのプライベート・コースが、それだった。その後これを基に9ホール

に、やがて18ホールに拡張、しかも2年後には組織化しクラブとした。これが現存する神戸ゴルフ倶楽部(KGC)である。

明治37年('04)W.J ロビンソンが、日本で2番目の横屋ゴルフ・アソシエーション(現,神戸市東灘区・魚崎中学校附近)を創設。これが10年後に移転、鳴尾ゴルフ・アソシエーション(現,西宮レインボータウン付近)となる。そして、大正9年('20)この跡地に生れたのが、鳴尾ゴルフ倶楽部(NGC)だった。創設の中心になったのは、西村貫一²¹⁾と鈴木商店²²⁾の数名およびKobe Regatta & Athletic Club (KR&AC)のクレーン兄弟らであった。NGCの誕生は「阪神間モダニズム²³⁾」の好例だった。

平生がゴルフを始めた契機は、広岡久右衛門('23:茨木カントリー倶楽部創設者の一人)からの勧誘だった²⁴⁾。ゴルフ道具は東京高商の後輩・川崎肇(日本アマチュア選手権大会3勝)に頼み、英国に注文して揃えた。中高年の健康には大いに適したスポーツだが、貴族的・富豪向きと感じ入会を躊躇。だが結局入会した。

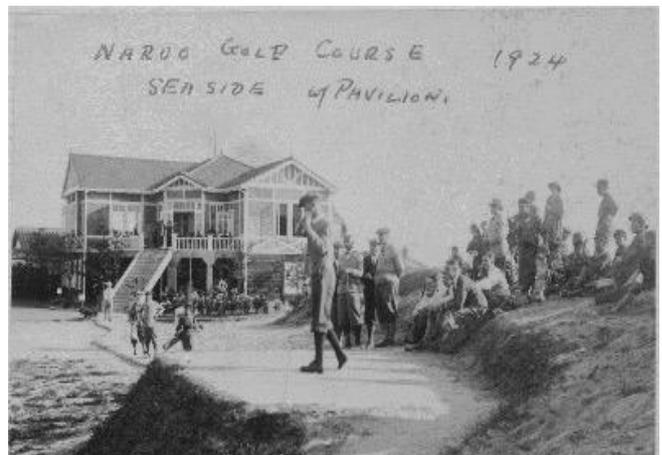


写真6. 鳴尾ゴルフ倶楽部:1番ティーグラウンド

(手書き1924は1925の間違い)(神戸市文書館蔵)

普段は、近くの鳴尾ゴルフ倶楽部(NGC)でレッスンを受けてたり、個人練習に励んだ。平生が練習に通うのは殆んど平日だったが、意外にもゴルフアワーが多かった。それだけ人気があったのだろう。(写真6)

炎暑焼くが如く、さすが広漠たる場内に一人のゴルファーを認めず。(中略) 岷々たる六甲の山脈と波静かにして大小の船舶行通へる茅海の煙波を右顧左眄して長閑なる心地を養ふ (1927.6.21)

(① 9 p83)

(略) 午後は何人もあらず、練習には尤も適当なり。六甲の山脈は煙の如きモヤの中に淡彩の絵の如く、小春日和の麗かなる日とて実に愉快なり。

(1927.12.5)

(① 9 p 341)

一方で平生は、モダンな意識も持ち合わせていた。夫婦同伴でゴルフの練習を楽しむことも間々あった。日記では計 5 回の記述が認められる²⁵⁾。練習場は意外に満員の場合が多く、その理由の一つが婦人ゴルファーの多さだった。平生は日記に彼女らを「モダン woman」「modern Mesdames」「modern girls」等と記し、阪神間のモダンさを表している。

若き夫人が golf 姿にて広き ground を club を提げて緩歩しつつある姿は、白帆に軽風を孕みて往来せる青海原を点缀せる帆船と春霞の中に臚に形を示す六甲の青巒と相對して、一幅の画図たるを失はず。実に快きなり。

(1927.2.27)

(① 12 p137)

しかし、平生は婦人ゴルファーの多きを諸手を挙げて賛成しない。「果して現代の日本の国情に於いて好ましき流潮なるやは訝しきものなり (1927.12.1)²⁶⁾」と記す。

六甲山の別荘

平生は大正 10 年 ('21) の夏、大阪・桃山中学校々長ローリングスの六甲山荘を購入する²⁷⁾。山上からの眺望は「一眸茅海は勿論、対岸に於ける紀泉の山脈(略) 眼下には石屋川、住吉川、芦屋川、夙川、武庫川の(略) 住吉川の東岸一帯には久原氏の大邸宅も(略) 野村氏の新宅も(略) 余の西洋館も (1923.6.10)²⁸⁾」と素晴らしかった。当時はケーブルもロープウェイも勿論ドライ

ブウェイもなく、山荘へは徒歩だった。時に平生 56 歳、だが平生は毎週末には山荘へ通った。それが功を奏して「(略) 余は 2・3 日を静養せんと登山(略) 余としては山中に暑を避けて静かに其心身を養ふの時日少なりき。左れど余の健康は幸に頑健にして未だ避暑避寒を要するに至らず (1926.9.12)²⁹⁾」と記すように、山荘行きは健康を保証してくれた。

六甲山にドライブウェイ、ロープウェイ、ケーブル等が設けられたのは、昭和 4 年 ('29) ~6 年 ('31) にかけての頃だった。しかし、70 歳になっても平生は徒歩で登っている。「ropeway 口より別荘まで 1 時間半を費す覚悟を以て登り始めたが(略) 山荘に達せし時は約 1 時間にして、学生に遅ること 5~7 分なりしと。(略) 何となく一種の快感を覚へ (1935.1.2)³⁰⁾」と記す。六甲山へ登ることで平生は、自らの身体の頑健さと精神力の強さを確認し、次へのエネルギーとしたのだろう。

山荘では別の楽しみもあった。「午後は書生 2 人を相手としてクロッカー戯をなし³¹⁾、薄暮球形を弁ぜざるに至る其間 7 戦して 7 勝す (1926.9.13)³²⁾。」「午前中は日記書や読書に費し午後には例のクロッカーに時の移るを知らず (1929.7.27)³³⁾」と。そして、夕食は「山荘に於て例に依り牛肉スキヤキを喫す (1929.1.2)³⁴⁾」。平生家には限らないが京・阪・神では、事ある毎にスキ焼きを食することが常だった。



写真 7. 六甲山の平生山荘 (「甲南 Today 2011. MAR No. 38」より)

野球観戦

当時はプロ野球もなく、関西で野球と言えば「甲子園」に代表される中等学校野球大会だった。平生は野球観戦が好みで、日記にも多くのページを割いている。

全国中等学校優勝野球大会（朝日新聞社主催・現、全国高等学校野球選手権大会）は、大正4年（1915）の夏、箕面有馬電気軌道（現、阪急電鉄）経営の豊中運動場から始まった。（写真8）平生はこの第1回大会から、観戦状況を日記に認めている。即ち、「熱夏に於て100余度（筆者注：37.8度C）の炎天下に火花を散らし電光石火の秘術を尽して相戦ふ。其壮挙実^{だふ}に懦夫をして立たしめ、随者^{ずいしや}をして快哉を叫ばしむる、実に竜攘虎搏^{りゆうじやうこはく}（筆者注：強豪同士が激しく争うこと）の状あり。（1915.8.19）³⁵⁾」と大いに期待している。



写真8. 現「夏の甲子園」全国高等学校野球選手権大会
第1回会場・豊中運動場（阪急電鉄経営）

甲子園大運動場（現、阪神甲子園球場）が、大正13年（'24）8月に竣工。この甲子園球場での初の大会、即ち第10回大会に平生は、息子2人（太郎と三郎）を伴い、しかも真夏の炎天下に3試合も観戦している³⁶⁾。その第2試合：神港商業 vs 米子中学の試合（筆者注：vsは対の意）を評して

Pitcher に何等故障なきに形勢少しく不利と見て交代せしむる如きは男性的遊戯なる Baseball に於いて男らしからざる行為として余は神港軍の行動を非難せざるを得ず。負くるも勝つも正々堂々凡て男性的 Spirit を以て戦はざる可からず。少しでも女々しき行動は之を避くるを可とする。（1925.8.18）

（①7 p328）

平生には、米国発祥の野球について少々理解不足の面が見受けられる。

もちろん夏だけではなく、春の選抜大会（毎日新聞社主催）も観戦している。昭和3年（'28）4月1日の日記には、「午前9時より3時過迄日光に曝されたるため顔面が日焼のため紅褐色となり、一目にて余が baseball 見物に行きたるを知らるるに至れり³⁷⁾。」春の強い紫外線も物ともせず、好きな中学野球を3試合も観戦、楽しんでいる。また時には、東京21:00発の夜行列車で帰阪（9:30住吉駅着）、甲子園球場へ直行することもあった³⁸⁾。

しかも観戦するだけでなく、日記に両チームのメンバー18名を記すことは勿論、スコア、打数、失策、残塁まで記している。しかも野球観戦の日には、他の事項についての記載はなく、その日の日記全てが野球一色に染まっている³⁹⁾。

昭和6年（'31）に続き昭和9年（'34）、ベーブールスら米国大リーグ選抜チームが、11月24日読売新聞社の招きで来日。平生は甲子園での日米野球を観戦している。ベーブールスの本塁打を期待していたが、他の選手も含め誰一人ホームランを打てなかった。「真剣味を欠けるためか。日米選手の競技に至りては殆んど見るの価値なく、真面目さを欠けるが如く興味なし⁴⁰⁾。」と扱き下ろしている。また、阪急・西宮球場で日本の職業野球を観戦（タイガース vs 阪急軍）。これについても「興味も熱意もなき勝負である（略）Player に少しも熱心の色も見へず⁴¹⁾」と記す。いずれにしても日・米の職業野球に対しては、厳しい批評が多々見られる。

時には、東京で早慶戦を観ることもあった。時代は日米戦争を予期する状況にあった昭和 16 年（'41）9 月、神宮外苑での早慶戦。

文部省に於ては(略) 静粛を保たしめんため拍手の外応援団の活動を禁じたるためか何となく活気と興味を失ひたるが如し。(略) 角を矯めて牛を殺すの感あり。為めに試合其者も活気なく興味索然たるものあり。(1941. 9. 23)

(① 17p649)

米英との太平洋戦争が始まって半年。文部省は敵国スポーツ・野球の弾圧を企て、翌（'42）年、東京六大学連盟を解散させた。さらにその翌年、学徒出陣壮行会（文部省主催：囃 18.10.21）を次週に控えた 10 月 16 日、「最期の早慶戦」が行われた。(写真 9) これ等について平生が、どのように考えていたか、日記に言及はない。



写真 9. 早大歴史館・企画展ポスター

「最期の早慶戦」(1943(囃 18)年 10 月 16 日)

スポーツの奨励

18 世紀後半からの産業革命は、英国に世界一等国の地位をもたらした。経済はもちろん、政治的にも世界をリードする国家へと成長著しかった。この間、イングランドのラグビー校に始まる教育再興の流れは、スポーツの奨励・実践をその中核

とし、やがて「アスレティズム」と呼ばれる教育思潮となり世界へ広がった。この時期、平生は 2 年足らず、東京海上ロンドン支店・監督に就任する(1897.11~'99.10)。この間、平生はロンドンに在って英国で受けた親切な出来事に触れ、エピソードを書き残している。

汽車の網棚に帽子(略) 忘れた。(略) 住所を書いて帰宅。翌々日に(略) 届けてくれた。

(④ p207~208)

英国の巡査は、公衆に対しても権威を弄ぶ事なく、親切丁寧にしてしかも保護と治安維持の責任を尽し(略) 羨ましきことである。

(④ p200)

ある日、余が帰宅(略) 食堂には生花を飾り、食器も手巾も食卓の被布も、総て平日のものにあらず、(筆者注：家主) 夫妻もイブニング・ドレスを着し、来賓として長女夫妻もあり、(略) 本日は何か当家に於ける祝事ありやと問ひたるに、本日は(略) 貴君の(略) 誕生祝賀会をなせるなり。食事も特別料理にして(略) 七面鳥の蒸焼もあり

(④ p200)

(略) 非常に家庭的にして毫も下宿人より利益を搾らんとするが如き行為絶無なりしかば(略) 退英迄 1 回も他に移住せず、1 年 8 か月この家に同居したるなり。

(④ p199)

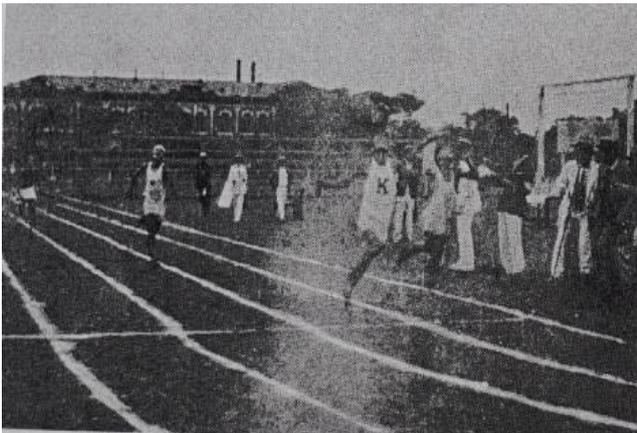
これ等の経験が平生に親英の念を抱かせ、甲南高校に英国型の教育を導入させる素地となったといえるだろう。

大正 13 年（'24）9 月、平生はアメリカ、ブラジル、ヨーロッパ外遊の旅に出る。海外へは実に 17 年振りのことで、人生第 3 期・社会奉仕時代のヒントを得るためであった。

ところで、外遊に先だつ 1 ヶ月余り前、新設の甲南高校にとって輝かしい出来事があった。それは 7 月 27 日、陸上部が東大グラウンドで行われた第 1 回全国高等学校リレー大会に出場、「400m

リレーの甲南チームが予選を勝ち抜いて決勝に進出⁴²⁾。「進藤次郎(兼ラグビー1文、後、関西ラグビー協会会長)・柏原方勝・高柳常雄・山中弘雄(旧姓土居:兼ラグビー部1文⁴³⁾)ら4人のメンバーが、400mリレー決勝で見事なバトン・タッチを見せて優勝⁴⁴⁾。初参加で初優勝したのだった⁴⁵⁾。「応援隊と共に参観していた釦三郎は覚えなく流涕し嗚咽した⁴⁶⁾」と言う。

写真 10 この優勝は単に競技上において祝すべきに留まらず、甲南高等学校の何物たるやを表示したるものとして^{じゆん}恂に顕著なる功績であった。甲南の生徒が(略)寸毫も卑下せず、何等怯懦^{きょうだ}の様子もなく、正々堂々として力戦奮闘し、もって甲南学園のために万丈の気を吐いたことは(中略)釦三郎の「欣快を禁ずる能わざるところ」であった。(②p477)



リレーで優勝の瞬間

写真 10. 第1回全国高校大会 400mリレー (100m×4)
優勝の瞬間：甲南高校・山中選手
(『甲窓 2020 年 63 号』より)

ロンドンへは、大正 14 年(’25)「1 月 12 日(中略)に入り、それから 2 月 18 日まで⁴⁷⁾」滞在、その間いくつかの学校を視察した。マーチャント・テイラーズ校とクライスト・ホスピタル校を訪問し、「(略)学科に重を措かずして人物養成に重を置けることが余の尤も敬服するところなり。

48)」また、ケンブリッジ大学・在学中の池田潔(リース校卒、『自由と規律』著)を訪ね、リース校「(略)に於も sports は必須科目として強制的に之を課すことは実に著しき事なり。夏は cricket or tennis、冬は football、次いで hockey (略) (1925.2.16)」と聞く。同時期、日本の元知事ら 2 名が、ロンドン地区・教育局長を訪問視察。「英国に於て、斯様に立派な人物が排出する理由を知りたい」と質問。返答は次の通りだったという(要点のみ記す)。^①スポーツマンシップを涵養すること。^②学校と家庭とで共同して教育を施すこと。この報告を耳にした平生は、「余はこれを訊き感歎措く能はずして曰く。(略)こは我等が設立せる甲南小学校、全女学校、及甲南高等学校に於いても之を応用せんとす(1925.1.29)⁴⁹⁾」と。さらに、

英国に於けるスポーツマンシップは日本に於ける武士道と全一にして、正を踏んで怖れず、義に^{ふさ}伏^{れんち}つて屈せず廉耻を尊び、犠牲を敢えてする(略)日本武士道が(略)喪失せる今日、教育の力に依りてかかる精神の涵養を計るの外、道なき(1925.1.29) (①6 卷 p 511)

と記す。平生は自身の考えと英国パブリック・スクールの教育方針が、一致することに意を強くした。

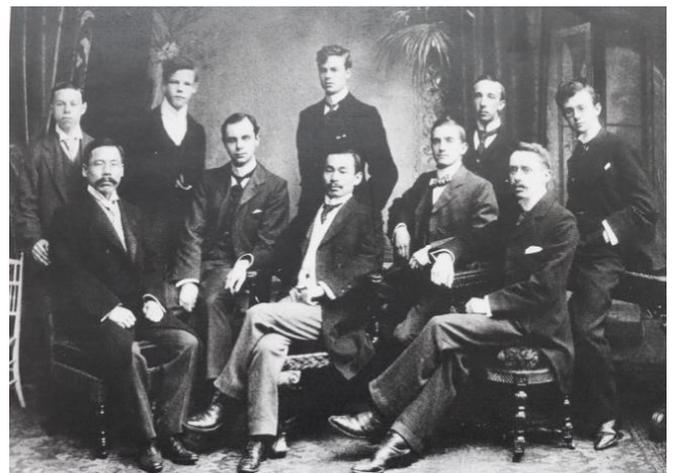


写真 11. 東京海上保険・ロンドン支店時代の
平生釦三郎(左端：椅子)
(甲南大学資料室より)

また、先の第1次大戦に各校の卒業生多数が、志願したことについても記している。「St. Paul's の如き定員 620 名中 (略) 戦死者 500 人を超す (1925.2.15) 50)」と聞き、また、「イートン boys 在學生 4 千数百名中の約 2,500 人が戦死せる (1933.10.30) 51)」と。さらにオックスフォード大学への視察では、第1次大戦時、全學生約 5,000 名に対し 500 人を残して全員が志願したと聞く。後日、母校 (東京高商) の日露戦の戦死者数が 10 名足らずと知り、その差の大きさに愕然としたとも記している。そして、「兵は凶器にして軽く動かすべきものにあらざるも、一旦緩急あるときは進んで義勇公に奉ずること (略) この信念を養ふには sports が必要である (1928.1.16) 52)」とまで記している。

なお、平生が前述のリース校を訪問した際、卒業生・寄贈者名簿の中に「田中銀之助 (略)」ら日本人 7 名の名前を発見し、「何れも余り国家の為に成りそうもなき人物 (1925. 2.16) 53)」と低い評価を記している。だが、田中銀之助は E.B クラークと共に、日本初・慶應にラグビーを導入した人物の一人だが、平生は知らなかったようである。

ラグビー観戦

平生のラグビー観戦が初めて日記に登場するのは、以外に遅く昭和 2 年 ('27) 11 月 13 日のことである。「午後 2 時甲南高校に於いて全校対神戸高商とのラグビー蹴球競技 54)」。この日、息子・三郎は怪我のため欠場。試合中、双方 3 名に入院を要する怪我が発生。「スズ子が之を見物し居りたらんには必ず蹴球部の脱退を entreat するならんと思へり 55)」と記す。

以降、三郎が出場した試合は、詳細に記されている。例えば、神戸東遊園地での甲南高校 vs. 姫路高校の試合。

(略) 姫 5、甲 3 にして 10 分を余すのみ (略) 甲南は必死の勇を鼓して前進し、ドリブルにてゴールに近づき終にトライしたるが、余すところ 3 分のみ。

(略) 残りし 3 分が速やかに去れかしと思ふときは口中の唾も乾きて咽喉がひつつつかの感あり。終止の響きを聞きたる時は覚はず拍手し、帽を揚げて喝采し (略)。(1927.11.23)

(① 9 p 318~319)

と自らの身体状況をも交えて子細に記してる。

ラグビー観戦の多くは、娘・息子や寄宿生らを同伴しているが 56)、時には夫婦同伴での観戦もある。「この日スズ子が初めて Rugby game を見物に来りしが、三郎が終始勇敢に且機敏に sportsmanlike の動作を見て心中喜びを禁ぜざりしもの如し (1928.11.10) 57)」と。

日記に見える甲南の試合観戦は、上記 2 試合を含め計 9 試合。記された最後の試合は、インターハイの優勝決定戦、vs 成蹊高校。既に太平洋戦争が始まって 8 ヶ月近い昭和 17 年 ('42) 7 月 31 日。この日、日記には、「吉祥寺 成蹊高等学校に赴く。Inter hi の (略) 前半に甲南が 5 点を得、後半 (略) 再び 5 点を取得せられて甲南 10、成蹊 0 にて甲南に優勝旗を授けらる 58)」と記している。



写真 12. 甲南高校、成蹊高校に勝利しインターハイ優勝

(『甲南ラグビークラブ 75 周年誌』より)

一方、甲南以外の試合についての日記記載は、計 30 試合にも及ぶ。主なものは、早稲田 vs 慶應、京大 vs 慶應、明治 vs 同志社、早 vs 同、早 vs 明、

京大 vs 東大など。対校戦以外では、全関西 vs 全関東や中等学校大会など。外国チームとの対戦は、フランス vs 関西クラブ、豪州学生 vs 慶應、早稲田、全日本、全関西、カナダ vs 全日本などの観戦記が残る。試合会場も花園、京大、甲子園、浜甲子園、神戸東遊園地、神宮外苑などへ足を運んでいる。



写真 13. 対カナダ戦の全日本チーム（於花園）

平生鈞三郎（前列左から3人目）

（堀アサ子：三郎息女の提供）

中でも特に詳しく記しているのは、息子・三郎が出場したカナダ vs 全日本の試合。しかし、この日に至るおよそ1年半前、三郎は選ばれながら全日本のカナダ遠征を辞退している。「夏季長期休業中ならいざ知らず、学期中に2ヵ月も欠席するようでは学生の本分が果たせない」との父・鈞三郎の厳命だった。そして迎えた翌シーズン、昭和7年（'32）1月31日。カナダは花園ラグビー場に姿を現わした。観衆は満員の2万数千人、その前で三郎は思いの丈をぶつけた。

（略）時間は刻々と迫り余すところ僅かに3・4分となり、（略）余は三郎の一挙一動には眼も放たず注意しつつありしが、（略）俄然球はスクラムより日本側に出で（略）球が何より三郎に送られたるとき余は己を忘れて三郎の奮闘を祈りしが、三郎は巧みに球を取って前進すること10数ヤード、follow せる北野に pass せしに北野は（略）敵陣に走込み try となりたるときは満場の観衆は総立ちとなり拍手の声天を動せりとも形容すべく（略）time up となりたる

が、観衆は欣喜^{きんき}の余スタンドより場内に飛降り日本選手を取囲みて嘗て見ざる熱狂振を示した。

（1932.1.31）

（①12 p 672~673）

残り3分にして逆転の9-8。平生は息子・三郎を含め日本選手の沈着にして大胆なるプレーに魅入られたのだった。

No side のホイッスルを聞きたるときは如何にも名残惜しく、全試合を通じて観衆は競技に魅せられ酔へるが如き心地したる事は、余が日本に於てラグビー試合を初めて見たる数年間に嘗てなきほど興味多き三昧に入りたる事はなかりし。（1932.1.31）

（①12 p672~673）

三郎は、この試合の他にも全日本の vs カナダ第2戦（於、神宮 G：2/11）、また京大の vs カナダ戦にも⑩スタンドオフ（SO）として、3試合中3試合に出場している。

平生は明治30年（1897）東京海上・大阪支店長に就任。以来、関西の財界人との繋がりも深くなり、ラグビー好きでしかもラグビーの奨励者として知られていた。このような平生を「関西ラグビー協会の役員等は余を会長として推戴せんと余に同意を迫りつつあり（略）特別 box に導きたり。（略）協会理事長・田邊久萬三氏に会す（1934.1.21）⁵⁹⁾」など関西協会々長への「外堀を埋められ」そんな状況にあった。昭和14年（1939）、神宮外苑での早明戦・終了後、時の会長・高木善寛氏とバツタリ顔を会わせた。平生が「今後良試合あるときは招待券を送られたしと求めたるに⁶⁰⁾」、高木会長は「貴殿は Rugby fan として何人も知らるることなれば招待券を要せず、木戸御免として入場せられたし（1939.12.3）⁶¹⁾」との言葉に、周りの者たちが大笑いしたこともあった。それほど平生のラグビー場通いは、関西はもちろん関東でも有名だった。

ラグビーの奨励

現在、花園の高校全国大会に出場する学校、中でもラグビーを経営戦略の一環として利用する私学も多い。このような方策は戦前から野球に見られたが、ラグビーでは戦後も昭和45年(1970)代以降の動きであり、かなり後発である。しかし、現状行き過ぎの感も否めない。

昭和5年(1930)の秋、平生は「スポーツが民衆化すると共に興行化するの惧れを十分孕んで居る(略)baseballに於て然り(1930.9.26)⁶²⁾と警告している。

平生がスポーツ、中でもラグビーを奨励するのは、もちろん経営戦略の一環ではない。平生が信奉する教育理念〔①徳育、②体育、③知育〕の一環としてである。前述したように平生は、「(略)人格の修養、健康の増進を第一義とし、個性を尊重して天賦の知能を啓発すべき知的教育を施さん⁶³⁾」と言う。記号化するならば「①徳育=②体育→③知育」となり、この「①徳育=②体育」が即ちスポーツ活動や武道である。これらを通じて徳育を施し人格を陶冶し、合せて健康を増進させようとするものである。英国的に言えば、「スポーツを通じてのジェントルマンの育成」と言えるだろう。

しかし、あらゆるスポーツを奨励するのかと問えば、「Sportsにても本校に於ては団体競技たるリレーレース、テニス、バスケット、ヴァレー、ベース、Rugby footballを奨励す。⁶⁴⁾(1934.11.11)」その結果として「(略)体格検査の成績は全国高校生の夫と比較して最優位にある(1934.11.11)」と記し、自らの教育方針の成果に満足を示している。

ところで、なぜラグビーなのか。平生はラグビーのどこに徳育、即ち人格形成・陶冶の可能性を見出したのだろうか。

第5回開校記念日(1928.1.16)に平生は、「(略)傷害を意とせざるfair playを主として行ふRugby footballの如くは、諸子が肉体と共に精神に共に修練せしむる好個のsportsにあらずや。

(1928.1.16)⁶⁵⁾と語り、英国を引合いに出し「英国人はこのSportsに依り正直、公平、忍耐、勇気及協同などという諸徳性を涵養せんとするのである(1928.1.16)⁶⁶⁾。そして、その成果を次のように説明する。「先きの欧州大戦争に於て3ヶ年余の敗北続きにもかかわらず、最後の勝利を贏ち得たるは、全くこのRugbyに依りて養はれたる国民性の発露なり(略)(1928.3.20)⁶⁷⁾と。また英国人は、なぜ小学生にもラグビーをNational Gameとして奨励するのかと言えば、「第1.fair、第2.honesty、第3.courage、第4.cooperationとの4つの大なる徳性を涵養する尤も適したるもの」であると語り、さらに「Rugby footballは、日本人の如く我慾のためにも他を陥穽するも辞せざる利己心強き日本人には至高好適なるadviceを与ふるもの(1928.12.2)⁶⁸⁾であるとも説明している。

東京高商の後輩・椎名時四郎(後、日本ラグビー協会々長1973~'79)が卒業時、平生は一書を送っている。当時の社会状況は、金融恐慌が生じ蔵相の失言から取付け騒ぎも起こり、『大学は出たけれど』(1929年映画:小津安二郎監督)なる言葉通り大卒でも、就職に難儀した暗澹たる時代だった。

道義頹廢、我利我慾(略)の跳梁跋扈(略)。

之は全く明治以後の教育が知育偏重にして人格修養を等閑視したる結果であります。左れば政治国難、経済国難、思想国難の來襲を撃退せんには武士道的精神の涵養の外他にありません。(1929.1.30)

(略)小生が各種のsportsの中にてラグビー蹴球を推奨いたしますのは、このsportsこそ我が青年に武士道的訓練をなし紳士的精神を涵養し得るものと考えたからであります。(1929.1.30)

(⑩10 p305)

平生はラグビー推奨の理由について上述のように、ラグビーが武士道的精神及び紳士的精神を涵養し得るからであると明確に記している。そし

て、次の4つの徳性、つまり「第1.fair（筆者注：公正）第2.honesty（同：誠意）第3.courage（勇氣）第4.cooperation（協力）（1928.12.2）⁶⁹⁾を涵養できると記す。そして3.（勇氣）の具体例とし「tackleの如き最も勇敢にして（略）（1928.12.2）⁷⁰⁾」、4.（協力）の例として「15人のmembersは（略）自己の職務を完全に決行せざるべからず（1928.12.2）⁷¹⁾」と英国H.ネルソン提督と同様の言葉を残している⁷²⁾。加えて「（略）ラグビーfootballが（略）日本人の国民性として欠如せる点を奨励し得るsportsなれば之を日本に普及して学校の遊技としたらんか⁷³⁾」と述べ。さらには戦術を考究し、次のようにも記す。

我国古来の習慣として一騎打ちを奨励し、個人に他に優越せんことを要求す。されば（略）Rugby footballに於ては功を他人に譲り、他人にchanceを与ふる事を以て本義とし、かくせざれば勝利を得る能はざるよう仕組まれたればなり。（1934.12.26）

① 15p363)

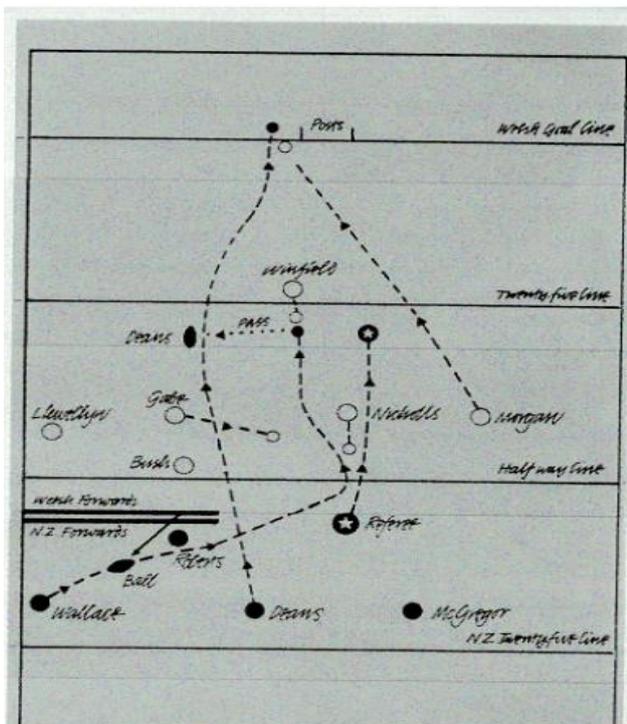


写真14.「幻のトライ図」NZのDeansトライするも

認められず

（「ラグビーマガジン」1982年3月増刊号—世界ラグビー熱闘の1世紀）

日本人の欠点を矯正するためにも是非ラグビーを活用すべきと主張する。また平生は、レフリーの絶対性についても日記に認めている。「（略）三郎がラグビーエピソードと題して一文を寄せたるが（略）（1933.3.5）⁷⁴⁾」と、その内容を詳しく記述している。それは、「幻のトライ伝説」のことで、要約すると写真14のようになる。

1905年（齢38）ニュージーランド（以下、NZ）が英国遠征を敢行。32勝したが、最終戦ウェールズに0-3で敗れた。この試合NZのB.ディーンがトライしたが、レフリーは認めなかった。それは誤審だった。しかし、レフリーの裁定は絶対である。周囲は色々取り沙汰したが、当の本人であるB.ディーンは一切黙して語らずであった。年月は流れ、12年後の第1次世界大戦中。英NZ軍の志願兵B.ディーンは、1917年（年6）ベルギー戦線に在って重傷を負い、最期に「あれはトライだった」と呟き、息を引き取った。

平生は「（略）世を去る最後まで黙していたところに、ラグビー精神をよく体得して居た真のラグーマンであった（1933.3.5）⁷⁵⁾」と。そして、「（略）余は涙なしには通読できざりし（1933.3.5）⁷⁶⁾」と胸中を吐露、三郎に「どうかこの精神を実行に於て他に示し其模範となることを希望する（1933.3.5）⁷⁷⁾」旨を手紙に認めた。

また、次の事実も平生が、ラグビーを大いに奨励する具体例である。即ち、甲南のグラウンドで行われた甲南 vs. 京大の試合中の出来事。

試合中 captain たる田中磐男（筆者注：6文）が倒れたるを見て、（略）単純なる捻挫（踵部）なりしが、同人は captain なるを以て試合には加はること不能なりしも、グラウンドの一隅に仰臥して仕合の終了まで場内を去らざりしは、この競技が sportsmanship を養成するに尤も適当なることを証して余ありと思ふて満足を禁ずる能はざりし。

（1930.9.26）

①11 p578)

当時のルールでは、負傷しても選手交代は認められなかった。そのため負傷選手はフィールドでの激しいプレーは無理でも、敵のトライ地点が、できるだけ端になるようインゴール中央・ゴールポスト付近にノーサイドまで居続けた。いわゆる「敢闘精神の発露」と言われる行為である。加えて平生は、主将として責任感の強さについても大いに賞讃している。

7. 平生イズムの浸透

大正デモクラシー、大正新教育運動とも相俟って平生の三育主義は、「①徳、②体、③知」、即ち「①徳＝②体→③知」でなければならず、その方策としてスポーツ、中でもラグビーの活用、それを通じた徳育・人格の陶冶を目指すものであった。その具体策の1つがラグビーを校技とし、ラグビー部主管のクラス対抗7人制大会を開催させた。それは全学生が楽しみにし、応援にも力が入る年中行事だった。

ところで平生の教育思想は、果たして学生たちに充分浸透したのだろうか。ラグビー部員や他の運動部員、一般学生たちが、書き残した文章（主として⑨p32～36）からそれを探ってみることにする。

陸上部

先述したが、大正13年（1924）7月24日、東大運動場での全国高校リレー大会に於いて、甲南陸上部の進藤次郎（兼ラグビー部）、柏原方勝、高柳常雄、山中弘雄（旧姓、土居：兼ラグビー部）の4名が、400mリレー決勝で見事なバトン・タッチを見せ、初出場・初優勝を果たした。翌（'25）年の大会でも1,600mリレーで優勝している。その後インターハイでは、昭和6年（'31）、昭和14年、昭和21年と3度の全国優勝を成し遂げている。個人では、松野栄一郎が昭和11年（'36）のベルリン五輪ハンマー投げで、戦後だが山本弘一が昭和31年（'56）のヘルシンキ五輪1,600mリレーメンバーとして出場している。

庭球部



写真 15. テニス：伊藤英吉（左）

（日本テニス協会より）

昭和8年（'33）デビスカップ日本代表に選ばれた伊藤英吉（後、伊藤忠商事会長）、その他7名が計36回もデ杯選手に選ばれている。インターハイや高専全国大会で9回の優勝を誇り、甲南各部の中では最多である。全日本選手権大会への個人出場も高校生ながら15名（矚2～14年）を数える。

ところで当時、世界的に有名プレーヤー2人が、甲南に来校したことを知る人は少ない。その一人は、清水善造⁷⁸⁾。『やわらかなボール』で教科書にも載った人物。現役引退後は、三井生命の大阪や神戸の支店長を務め、住吉に住んだ。その清水が1920年（矚9）ウィンブルドン決勝で戦った相手が、当時世界No.1のW.チルデン。この2人が昭和11年（'36）10月15日、甲南高校のテニスコート（現、甲南大学図書館辺り）で16年振りにプレーし、旧交を温めた。

バスケットボール部

関西では常に上位に位置し、インターハイでは第1回（矚4）～第20回大会（矚23）まで、計

4回優勝という偉業を成し遂げている。昭和13年（'38）卒業の宮崎豊は、昭和15年度・東大の主将として、続いて昭和16年の星、17年の岩尾と3代続いて甲南出身者が、東大バスケットボール部主将を努めている。（⑧ p 108）



写真 16. 甲板硬材を用いた屋外コート
（理事・伊藤忠兵衛氏の寄贈）
（『旧制甲南高校バスケットボール部史』より）

山岳部

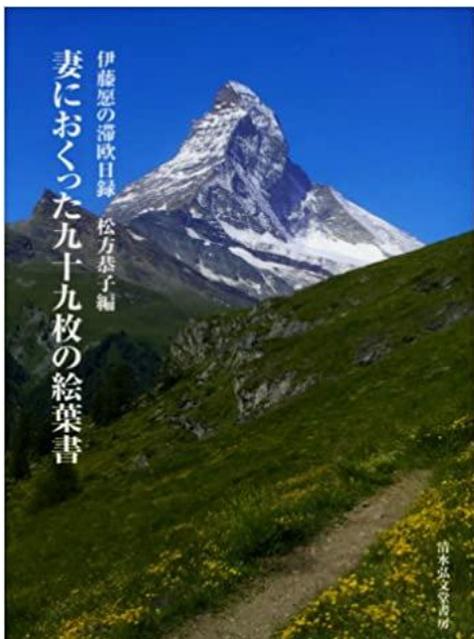


写真 17. 世界的登山家・伊藤 愿は渡欧中、妻に99枚の絵葉書を送っていた。高校時代ラグビーも兼部し部歌を作詞した（昭和4年文卒）出版：清水弘文堂出版

開校早々「遠足部」として発足、対象14年（'25）「山岳部」と改称。当時、輸入されたばかりのピッケル、アイゼン、ザイル、登山靴など最新鋭の道具を使って前穂高岳・東岩壁（井上靖『氷壁』で知られる）など、「日本アルプスの岩場に17もの初登攀ルートを拓き、世間を驚かせた⁷⁹⁾。」

（一部は「甲南ルート」と名付けられている）初期に活躍した主な部員は、ラグビーと兼部した伊藤愿⁸⁰⁾、水野健次郎（後、ミズノスポーツ社長）⁸¹⁾、田口一郎・二郎（後、日本山岳会副会長）⁸²⁾、小川守正（後、甲南学園理事長）らであった。

個性尊重

〔徳＝体→個性尊重→知的追究〕。平生はスポーツを通じて徳育と身体づくりを土台に、個性に応じた知的探究を求めた。後に東大・工学部教授を努めた寺尾 満は「在校中、よく聞いた言葉は〔個性の尊重〕だった⁸³⁾」と語る。

趣味や得意科目から興味を深め、さらに学問の世界へと進んだ学生も多かった。「現在エール大学教授の角谷静夫君（筆者注：ラグビー部6文）は（略）世界的数学者になられたが、個性の尊重という平生精神を地で行った人であると思う⁸⁴⁾」との声もある。

中学時代からアマチュア無線に興味を示した人物が、エレクトロニクス企業を起している。ラグビー出身の堀場雅夫（19理）は、甲南で「正田先生に会い物理をしたらターゲットが絞られ（略⁸⁵⁾」ベンチャー企業・堀場製作所を創立したと語る。

先輩の厳しい学問修行を垣間見て「勉学」の言葉を肌で感じ、やがて学問を生業とするようになったと言う阪大理学部教授・関 集三。

個性尊重の結果だろうか、次のような生徒たちもいた。昭和9年（1934）1月、甲南生9名が治安維持法違反で特高警察に逮捕された「白亜城事件」（全国初・甲南の白色コンクリート校舎を白亜城と呼んだ）。新聞も「阪神間の財界人や富豪の坊ちゃんが・・・」、と大きく取り上げた。前年に瀧

川事件が起こり、浦松佐美太郎著『たった一人の山』の題名が、個人主義思想を連想させるとして発禁処分になるような時代だった。彼等は左翼系のパンフを配布、軍事教練の時間増反対のビラを撒き、『資本論』の勉強会などもした。現在なら全く問題にもならない行為だったが、時代が、国家が、間違った方向へと進んでいたのだった。平生は何度も警察に足を運び「自分が責任を持つ」と掛け合うも拘留2ヵ月、やっと釈放。他校では放校・退学が当然だったが、平生は「勉強不足、もっと様々な勉強をし、それでもマルクスが…」と言



写真 18. NHK「事件記者：相沢キャップ」

永井智雄（本名：飯沼 修）（NHKアーカイブスより）

うなら、その道へ進め」と諭し復学させた。「平生は赤」と父兄会や右翼から非難の声もあったが、平生は意に介さなかった。逮捕された9人中7名が山岳部だったが、部も存続させた。自主退学した飯島 修（後、俳優・永井智雄：同志社卒）以外の8名の中には、後の東大原子物理学教授・山口省太郎や前述の関 集三らもいた⁸⁶⁾。「白亜城事件」が起こる数か月前、一人の学生が万引き・換金する事件が発覚。平生は保護者・教員らの嘆願をはねつけ、放校にした⁸⁷⁾。

大正14年（1925）、学校で軍事教練が義務づけられることになった。それは「宇垣軍縮⁸⁸⁾」による余剰軍人の受け皿だった。配属将校は大尉以上で大佐まで。校内では校長の配下に属し、訓練内容は軍隊と変わらないが、戦争目的とは異なり心身の鍛錬であるという。しかしながら、大阪・天六での「ゴースト事件⁸⁹⁾」（昭和8年）に見られるように軍人が、のさばるようになる。

後に京都工芸繊維大学・教授となる松尾秀郎は、とにかく軍事教練が嫌いだった。それが態度に出るのだろう。だから睨まれたと言う。教練の試験時「回れ右」を左廻りし、エライ目に遭った。また銃の掃除の際、誰かが銃身に砂を詰め込んだ。これがバレて、また大変な目に遭ったという⁹⁰⁾。

敗色濃い昭和20年（'45）3月、軍事教練のとき配属将校・福永常助の訓話があった⁹¹⁾。福永大佐は「最近、戦局が好転せず、敵は本土に近づき（略）何故このようなことになるのか。解かっている者は言ってみよ。」「・・・」暫く沈黙が続いた後、T君が「軍人がバカだからであります。」大佐が怒鳴り散し「何という怪しからぬことを言うか。（略）放校だ。退学だ。貴様のような奴がいる学校は俺が潰してやる」と喚き散らして校舎へ去った。だがT君は退学にもならず、甲南の名も消えることはなかった⁹²⁾。

進学

進級のハードルは、意外に高かった。甲南の成績評価は、60点未満が赤点（欠点）で、赤点が3科目以上あると落第、40点台の赤点なら2科目扱いで、30点台なら3科目扱いとなった。なかなか厳しかったので「尋常科4年、高等科3年、計7年を終える頃、クラスの1/3が落第生であった⁹³⁾」という。

第1回卒業生の進路先は、43名全員が国立大学に進学した。その実績は「京大33名、東大8名、九大1名、金沢医大1名⁹⁴⁾」だった。大正15年（1926）4月11日、第1回卒業式を挙げる。平生は、この日の日記に「（略）実に近来の快事にして、欣喜胸に満ち、余の挨拶を終ると共に放たれる力を籠めたる拍手は暗涙を催さしめたり⁹⁵⁾」と記す。第1回卒業生は、創立以来の期待と重圧を背負ったが、見事な結果を残した。他学年でも同様に気を吐いている。例えば昭和14年（'39）卒の理系クラス（26名）では、その全員が国立へ進学している（東大6名、九大4名、阪大4名、京大4名、岡大2名、名大1名、千葉医大1名、死亡4名）。

スポーツの奨励は、各クラブの全国的な活躍を生んだ。だが、それに負けず劣らず学生たちは、自己の興味を学問へと繋ぎ、それゆえ進学結果も素晴らしいものだった。平生が目指した《個性尊重の教育》は、生徒たちの努力とも相俟って文・武に亘ってその成果を大いに発揮した。

8. ラグビー部員と平生イズム

平生の「徳・体・知」と武士道精神、教授陣の大正デモクラシー思潮、東大ラグビー出身の監督・南郷教授、阪神間モダニズムを背景とする部員の家庭環境、これらが相俟って生れた甲南ラグビー部の雰囲気は、次のようなエピソードを生んだ。

甲南高校ラグビー部出身の世界的数学者、^{かくたに}角谷静夫。(写真 19)、彼は頭脳流出第 1 号と言われた人物で、米国プリンストンの高等研究所 (IAS) 及びイエール大学・数学科で 38 年間に亘って研究及び教育に努めた。



写真 19. 世界的数学者・イエール大学教授
角谷静夫氏 (wikipedia.より)

ラグビー部時代、周りの部員から「脳震盪を起こす度に頭が良くなった⁹⁶⁾」と冗談を言われた角谷だが、もともと秀才の誉れ高かった人物である。京大・物理学科に進学した 8 歳上の兄 (20 歳で夭折) の影響で、幼少時から算数・数学に非常なる興味を示した。しかし、父が高名な弁護士だったため後継ぎを目指すよう厳命され、甲南では文系

へ進んだ。志望大学を決める時期になって角谷は、平生の言葉「個性尊重」を思い出し、何としても数学科に進みたいと父を説得、進学の許可をもらった⁹⁷⁾。だが校長・丸山 環は、角谷の進路変更にも強く反対した。それもそのはずで、当時の制度では帝国大・理系への進学は、高校で理系でなければ進学できなかった。当然、京大・東大などの門戸は鎖されていた。但し、東北帝国大学 (以下、東北大)・数学科のみが、例外的に条件付きで文系からの進学を許していた。その条件は、理系で定員が満たない場合に限りであった⁹⁸⁾。ハードルは高かったが、理系・学生以上の実力を持つ角谷は、東北大への受験を諦めなかった。校長の反対に遭っても校是とも言う「個性尊重」を盾に自説を曲げなかった。それどころか角谷は、「支援してくれるラグビー部主将・西村磐男 (旧姓, 田中) と共に食堂横の煙突に登り、校長に反抗しハンガーストライキを起こした (筆者注: エントツ事件)⁹⁹⁾。」その後、紆余曲折もあったが、角谷は東北大・数学科へ無事入学したのだった。

昭和 6 年 (1931) 卒の主将・西村 (旧姓: 田中) は「(略) 一番大事なことは、フェアプレー精神だ。(略) 相手が勝てば、自分たちよりもそれ以上に練習したからで、相手を称える。自分たちも勝って相手から称えられるように練習する¹⁰⁰⁾」と語る。

第 1 期黄金時代を創出したメンバーは、大半が大学でもラグビーを続け、昭和 12 年 ('37) には、東北大: 山本正 (10 理)、東大: 野田真五郎 (10 理)、京大: 由良修 (10 文)、阪大: 楠本四郎 (10 理) 等が、各帝国大学で主将を努めた。また、京大では昭和 11 年 ('36) から池田 賢 (9 理)、由良 (上述)、川本信彦 (11 文) と、3 代続けて甲南出身者が主将を務めている¹⁰¹⁾。

「甲南精神は即ちラグビー精神である」との平生先生の言葉は、(略) 大きな心の支えであった。

(略) これに徹した私 (筆者注: 伊藤健一郎 17 理) は、英国的ヤング・ジェントルマンであることに

行動的に努めた¹⁰²⁾」と語っている。

平生は自らの思想に共鳴する教授陣を招致する。例えば、成蹊および東大ラグビー部出身の南郷茂治教授（英語/世界史）や紀元節の日、モーニング姿でセービング¹⁰³⁾をして見せた松井武敏教授（地理/歴史）。両教授の「2クラス70人中、16人もがラグビー部員、両クラスの首席もラグビー選手という有様だった¹⁰⁴⁾。」

京大時代にベンチャー企業（堀場製作所）を起ち上げた堀場雅夫（19理）は、「徳、体、知が一体になった教育が（略）私自身を勇気ある若者に変身させた¹⁰⁵⁾」と語っている。

当時、尋常科のラグビー部員・福井俊郎（1修理¹⁰⁶⁾：後、阪大教授）は、「世の中は忠君愛国一色、（略）ところが甲南へ来てみると全然違う。（略）自由があると感じました¹⁰⁷⁾」と語る。

南郷教授が赴任した昭和11年（'36）頃から一段と強くなった甲南ラグビー部。負けたのは京大、同志社など大学生チームのみ、と黄金時代。以前から何人もの甲南部員が、京大ラグビー部へ進んでいる¹⁰⁸⁾。しかし、京大に負けた借りをどうしても返したいと申し合わせ、京大のライバル東大へ進んだ連中もいた。それは、水田泰朗（17文）、伊藤健一郎（17理）、樫野順三（17理）、浜野祐二（18文）、角野源平（18文）、高橋勇作（19文）等だった¹⁰⁹⁾。（写真20）



写真20. 高橋勇作：甲南高校→東大・副将、JAPAN 主将
（『東京大学ラグビー部70年史』より）

一方、中川路家の3兄弟は¹¹⁰⁾、揃って京大ラグビー部へ進み甲南と京大両校で3人が同じユニフォームを着た¹¹¹⁾。

9. 戦争とラグーマン

昭和6年（1931）勃発の満州事変。それ以降の中国との戦争。加えて昭和16年（'41）12月8日に始まった太平洋戦争もミッドウェー海戦を境に戦局は悪化。昭和18年（'43）秋には学徒出陣も始まり、遠征試合も禁止となる。東大へ進学した高橋勇作は、「（略）極、近い将来、戦場へと駆り出されるという緊迫感と、ひいては〔死〕を見つめざるを得ない一種の恐怖・虚無に埋められたような¹¹²⁾」雰囲気を感じていた。戦場に赴く前に、どうしても好敵手・京大と試合をしたいと願った。他の部員も同様だった。もちろん京大のメンバーも同感だったという。

目立ちやすい東京を避け昭和18年（'43）10月19日、京都・三高Gで試合実施と決定。東大のメンバーは、前日の18日バラバラで夜行列車に乗り込み翌朝、京都へ。そして積年の思いをこの試合にぶつけた。試合結果は、東大12-11京大。レフリーは井藤高明（甲南高卒17理、阪大医学部）。当日の様子を『東大ラグビー部70年史』（p118）は、次のように記している。

もはや試合の勝敗など問題ではなかった。それぞれが、お互いに思い出のゲームができたこと、身体をぶつけ合ってプレーできたこと。それだけで満足だった。試合が終わり、両大学のラグーマンたちは汗に滲んだジャージーの肩と肩を組んで、両軍の校歌を歌った。その後は、宿で祝盃となったが、（略）戦争で出来れば死にたくないな、と漠然と思ったのを覚えている。

ラグビー精神

甲南出身・京大の主将を務めた川本信彦（11文）。彼の南方戦線での体験は、ラグビー精神の最たるものではなからうか。少々長くなるが以下に引用する。

貨物廠担当（筆者注：食糧等の補給担当）将校だった川本信彦（11文・後、小西六社長）は、食料もなく草木・爬虫類を捕食して生き延び、最前線から敗走してくる兵士たちにわずかな乾パンと湯茶を与え、さらに後方へ退却させる仕事に就いていた。連絡の将校のみに一杯の味噌汁と1本のタバコを差し上げて（略）味噌汁を涙ながらに味わい御礼を言って去られる人が殆んど。（略）中には是非もう1杯と粘る人も（略）ある日、森田君（正俊・12理：筆者注）が、部下30人余りを引き連れて到着（略）例によって味噌汁とタバコを差し出したところ、「私の部下は30人ばかりいます。それに1杯ずつ当たりますか」「いや、それだけの量はありません。貴方だけです。ここで飲んで行って下さい。」「そうですか、部下に一滴もわたらぬなら、私はいません」と立ち去って行った。そのやせた後ろ姿に、これこそ真のラグーマンだと甲南魂を見た気がして、私は思わず頭を下げました。（略）あの激しい戦闘の後、飢餓と悪疫のジャングルをさまよい、苦しいひもじい中で、1杯の味噌汁、夢にも見たであろう御馳走を、それを自分一人だけ良い目を見ることを断って立ち去る勇気、それは本当に光り輝くものだった（略）甲南魂と本当のラグビー精神が、「生と死」に直面した時に発揮されたんだ、と思います。

（⑩ p 163）

生と死に直面する極限の、しかも敗走・飢餓の戦線にあってもラグビー精神“*One for All*”¹¹³⁾を貫いた甲南ラグーマンもいた。（了）

【引用・参考文献】

- ①『平生鈆三郎 日記 1～18 巻、補巻』甲南学園 2010 年（第 1 巻）
- ② 河合哲雄『平生鈆三郎』羽田書店・拾芳会 1952（叢 27）年
- ③ 津島純平『平生鈆三郎 追憶記』（財）拾芳会 1950（叢 25）年
- ④ 平生鈆三郎『平生鈆三郎 自伝』名古屋大学出版社 1996（叢 8）年
- ⑤『甲南学園 50 年誌』甲南学園 1971（叢 46）年
- ⑥『甲南学園の 70 年』甲南学園 1992（叢 4）年
- ⑦『平生鈆三郎講演集 一教育・社会・経済一』甲南学園 1987（叢 62）年
- ⑧『甲窓 11 号 甲南創立 50 周年記念号』甲南同窓会 1969（叢 44）年
- ⑨『旧制 甲南高等学校 一歴史と回想一』旧制甲南高等学校同窓会 2017（叢 29）年
- ⑩『甲南ラグビークラブ 75 年誌』甲南ラグビークラブ・中高 OB 会 1999（叢 11）年

- 1) 岐阜加納町・太田成和「附録 平生鈆三郎小伝」③ p191～192
- 2) ② p7
- 3) 旧, 岸和田藩家老: 岐阜加納町・太田成和「附録 平生鈆三郎小伝」③ p191～192
- 4) ④ p441～442
- 5) ① 2 巻 p 124
- 6) 坂本勝比古「御影・住吉／神戸」『近代日本の郊外住宅地』鹿島出版会 p425
- 7) ⑦ p2
- 8) ⑤ p 139
- 9) ⑦ p 4
- 10) 『平生日記 18 巻』「平生鈆三郎年譜」 p 728
- 11) 平生自らが「徳・体・知」と示したことはないが、「(略) より簡潔に言えば徳育・体育・知育の三育主義の理念がそれである」と『平生鈆三郎講演集』（甲南学園 1987 年）に記されている。
- 12) ① 2 巻 p114
- 13) ① 2 巻 p114
- 14) ⑦ p 45
- 15) ⑦ p 2
- 16) ① 1 巻 p289
- 17) ② p 52～54。
- 18) ④ p78
- 19) 財囊とは財布のこと。18 世紀初頃から始まった英国の競馬賞金レースが発祥。貴婦人たちが寄付を集め賞金としたことが切っ掛けで、やがて他のスポーツにも広まった。
- 20) ② p105
- 21) 西村貫一（1892～1960）：神戸の西村旅館々主。1916（炬 5）年頃からゴルフを始め、1920 年鳴尾ゴルフ倶楽部創立メンバーの一人。マサ夫人も 5 年連続で関西婦人チャンピオンとなる名手。1930 年『日本のゴルフ史』を著し初期の姿を伝えた。また、世界のゴルフ文献を収集、機転を利かし戦後 GHQ からの接收を免れた。その文献類は JGA 博物館（廣野ゴルフ倶楽部内）に保存されている。
- 22) 鈴木商店：明治初期、神戸で鈴木岩次郎が、洋糖取引商を創業。その後、番頭・金子直吉の下、台湾で樟脳、ハッカの取引・製造に乗り出す。その後、幾多の業界の企業を傘下に収めた。第 1 次大戦景気を利して貿易でも巨利を得、三井物産、三菱商事を凌いだ。だが、昭和不況にあえなく倒産。神戸製鋼、帝人、日本製粉、播磨造船、日商岩井（現, 双日）などは、鈴木商店の流れを汲む企業である。
- 23) 阪神間モダニズム：明治末頃から昭和 15 年頃にかけて、神戸からの欧米文化と大阪・上方文化が、阪神間で融合し花開いた生活文化をいう。現代生活の黎明期の姿を示した。

- 24) 茨木カントリー倶楽部創立者の一人が広岡久右衛門（旧姓:三沢正直）で、大同生命 3 代目社長。三沢は、慶應、三高に次いで日本 3 番目・同志社ラグビー部の初代主将だった。
- 25) ① 9 巻 p55、① 9 巻 p215、① 9 巻 p302、① 9 巻 p331、① 12 巻 p137
- 26) ① 9 巻 p 332
- 27) ① 4 巻 p96
- 28) ① 5 巻 p333
- 29) ① 8 巻 p306
- 30) ① 15 巻 p376
- 31) クロッカー：英国 14 世紀頃からのゲームで、日本のゲートボールの原形。テニスの全英選手権で知られるウィンブルドンのテニスクラブ。このクラブの正式名称は、「オールイングランド・ローンテニス&クロッカー・クラブ」で、元々クロッカーのクラブだった。
- 32) ① 8 巻 p307
- 33) ① 10 巻 p575
- 34) ① 10 巻 p267
- 35) ① 1 巻 p410
- 36) ① 6 巻 p282
- 37) ① 9 巻 p503
- 38) ① 17 巻 p342
- 39) ① 9 巻 p537, ①10 巻 p70 等々
- 40) ① 15 巻 p321
- 41) ① 16 巻 p365
- 42) 『甲窓 2020 年 63 号』甲南学園同窓会 p79
- 43) 1 文：第 1 回卒業生で文系の学生との意味。13 理：第 13 回の卒業生で理系学生。（偶々、数字と昭和年度が同じ）。
- 44) ⑥p38
- 45) 翌(1925)年の大会(7/24)でも 1,600m リレーで優勝している。
- 46) ② p477 また、次のようなエピソードも残る。「平生は、内ポケットから 100 円札を抜き出して、選手たちに腹一杯食べさせてくれたまえ」と引率の上林教諭に手渡した。100 円といえば、当時のサラリーマンの 2 ヶ月分の俸給に当る。学生たちの中には、100 円札を見るのが初めての者もいた。⑥p38
- 47) ② p512
- 48) ① 7 巻 p14~15 (1925. 2. 15)
- 49) ① 6 巻 p511
- 50) ①7 巻 p12~13 (1925. 2. 14)
- 51) ① 14 巻 p378
- 52) ① 9 巻 p410
- 53) ① 7 巻 p16~17 (1925. 2. 16)
- 54) ① 9 巻 p302
- 55) 「スズ子」と記しているが「すゞ」が戸籍上の表記である。① 9 巻 p302
- 56) 拾芳会（しゅうほうかい）：平生自身が経済的に困窮し学費に困った経験から 1912（昭和 45）年、私財を投じて創った育英事業。全国から優秀な若者を集め、国家・社会に貢献することを誓約させ返済不要の学資を援助した。160 名余りの若者がその恩恵を受けた。常時数名が、住吉の平生宅に寄宿していた。
- 57) ① 10 巻 p 194~195)
- 58) ① 18 巻 p227
- 59) ① 14 巻 p513
- 60) ① 17 巻 p64
- 61) ① 17 巻 p64
- 62) ① 11 巻 p575~576
- 63) ⑦ p 45
- 64) ① 15 巻 p302
- 65) ① 9 巻 p 409~410

- 66) ① 9 卷 p 409～410
- 67) ① 9 卷 p 510～511
- 68) ① 10 卷 p 221～222
- 69) ① 10 卷 p221～222
- 70) ① 10 卷 p221～222
- 71) ① 10 卷 p221～222
- 72) 1805 年、英国・海軍 H. ネルソン提督は、ナポレオンのフランス・スペイン連合艦隊とのトラファルガー沖海戦を前に“England expects that every man will do his duty.”（英国は各員が、自らの責務を尽くすことを期待する）と信号旗を掲げ、全員を鼓舞した。100 年後の 1905 年（囃 38）、これに倣い日露戦争・日本海海戦に於いて司令長官・東郷平八郎は、「皇国の興廃この一戦にあり、各員一層奮励努力せよ」と Z 旗を掲げて全軍を鼓舞した。
- 73) 67 に同じ
- 74) ① 14 卷 p9～10
- 75) ① 14 卷 p9～10
- 76) ① 14 卷 p9～10
- 77) ①14 卷 p9～10
- 78) 清水善造は、平生と同窓・東京高商の出身。1920(炬 9)年ウィンブルドンで日本人初のベスト 4 に進出。1922 年、全米選手権でベスト 8。両名の初の出会いは、1924 年ニューヨークで開催された如水会（東京高商の同窓会）に於いてである。現役引退後、清水は三井生命に転籍、大阪や神戸の支店長を勤め、神戸・住吉に住んだ。やがて、清水の次男・節郎が甲南に入学している。
- 79) 小川守正：甲南学園・前理事長「甲南ラグビー三題」⑩ p 128
- 80) 伊藤 愿：芦屋ロックガーデンで腕を磨き、高校生ながら日本アルプスに足跡を残す。甲南山岳部・部歌やラグビー部・部歌を作詞。京大山岳部時代には極地法を開発し、西堀栄三郎（後、南極観測隊長）を驚かせた。松方三郎の仲人で松方恭子（松方幸次郎の孫）と結婚。戦後は中央官庁からの派遣で欧州へ。世界の著名な山岳家と交友すると共にマッターホルンに単独登頂を果たす。世界的に活躍するも 48 歳の若さで病没。6 ヶ月の欧州出張中、夫人に 99 通の葉書を送付、後に『妻におくった 99 枚の絵葉書』（伊藤恭子編 2008）として出版された。
- 81) 水野健次郎：1931(囃 6)年 3 月、西村や多田らと共に残雪の白馬小蓮華尾根の初登攀に成功。阪大・理学部化学科卒。父・利八を継ぎ、カーボンファイバーを野球バット、スキー、テニスラケット等に活用するなど理系経営者として腕を振り、用品改良を進め世界トップクラスのスポーツメーカーに育てた。
- 82) 田口一郎・二郎兄弟：1931(囃 6)年以来、高校生ながら兄弟で日本アルプス数か所に初登攀を印す。東大山岳部でも活躍。1937 年兄弟で渡英、留学。スイス・アルプス各峰へ登攀。1939 年 9 月第 2 次大戦が勃発、帰国できず中立国スイスに留まる。1941 年兄・一郎が病死、二郎は一時日本公使館で働くも朝日新聞の記者になり、欧州の情報を日本に送信。11 年振りの帰国は 1948 年のことだった。1953(囃 28)年隊長・今西錦司と共にマナスル登山隊に参加、惜しくも 375m 手前で断念。1956 年やっと第 3 次隊が初登攀(8, 125m)に成功。以後、日本国内は登山ブームに沸く。1981 年、日本山岳会副会長に就任。
- 83) 寺尾 満(東大工学部教授)「応援団ざらい」⑨ p107
- 84) 林 龍雄「甲南時代の思い出」⑨ p 45
- 85) 堀場雅夫「ラグビー精神はベンチャー精神」⑩ p89
- 86) 山口省太郎、関 集三ら両名ともに甲南 10 回理卒：『平生さん物語』甲南学園同窓会 2003（囃 11）年 p5
- 87) 小川守正・上村多恵子『世界に通用する紳士たれ平生 三郎・伝』燃焼社 1999（囃 11）年 p165～167
- 88) 「宇垣軍縮」：1925(炬 14)年、第 1 次加藤高明内閣の陸軍大臣・宇垣一成が、4 個師団を廃し約 4, 000 人の将校を全国の中学校以上の学校へ配属、軍事教練を実施させた。
- 89) 「ゴーストトップ事件」：1933(囃 8)年、大阪・天六交差点で起こった陸軍兵と巡査の喧嘩に端を発し、陸軍と警察の大規模な対立事件となる。やがて軍部が法律を無視して動き、政・軍関係が正常に働かなくなるきっかけとなった。
- 90) 松尾秀郎(京都工織大教授)「イギリス貴族の子弟の学校の印象」⑨ p 33

- 91) ⑤ p105
 92) 22 回文・加藤直邦 ⑦ p52～53
 93) 24 回文・三杉隆敏 ⑦ p54。
 94) 「甲南のあゆみ④」 ⑨ p 20
 95) ② p 577
 96) 『甲南ラグビークラブ 75 年誌』 p43
 97) ①p1
 98) ①p1
 99) 『甲南ラグビークラブ 75 年誌』 p43 写真の説明。筆者注：「エントツ事件」
 100) 西村(旧姓田中)磐男「フェアプレーと友情」 ⑪ p 113
 101) 野田真五郎「ラグビー部の思い出」 ⑪ p115
 102) 伊藤健一郎(油業報知新聞・取締役)「甲南精神」 ⑨ p 140
 103) セービング：ラグビー技術の一つ。転がるボールに身を挺して跳び込み、味方ボールにする技術。
 104) 19 回文：福井 律「末久直心君を悼む」 ⑪ p 166～167。
 105) 堀場雅夫「人間改造」 ⑪ p 139
 106) 1 修理：旧制高校の理系高等科 1 年生課程を終了し、新制大学へ進んだ学生。
 107) 月刊誌『KOBECOCO 2019 4 月号』神戸っ子出版事業部 p43
 108) 進藤 (1 文)、立原 (2 理)、福島 (2 文)、平生三郎 (4 文)
 109) ⑩ p186～187
 110) 中川路家の 3 兄弟：忠男(22 理)、誠(23 文)、明(24 理)
 111) 甲南ラグビー部から京大へ進学しラグビー部に入部した人数。第 1 回卒業生 1 名 (以下、回生と人数) 4 回：1 名、6 回：5、9：1、10：2、11：1、12：3、14：3、15：1、16：1、17：2、18：1、19：4、20：1、21：1、22：1、23：2、24：2、25：3。旧制時代の合計：ラグビー部 36 名が京大へ進学しラグビー部に入部している。(⑩ 及び『京都大学ラグビー部 60 年史』1987 (闘 62) 年より)
 112) 高橋勇作「戦時体制下の学窓生活」 ⑨ p 153
 113) “One for All, All for one” は、一般的には「一人は皆のために、皆は一人のために」と訳す(コープこうべ等)が、ラグビーでは「一人は皆のために、皆は勝利のために」と言う。従って、この場面では、前半のみの“One for All”とした。

(完)

本文は、昨年度出版した『近代神戸の群像』(神戸居留地研究会編 神戸新聞出版センター)に掲載されたものを改訂したものである。